三重県委託事業　人権保育専門講座８　連続講座②（2021年11月19日）

『性の多様性と保育』

常磐会短期大学 教授　卜田（しめだ）　真一郎（しんいちろう） さん
保育士　村尾（むらお）　雪翔（ゆきと） さん

人権保育専門講座８の連続講座の第２回は、大阪市の保育所で勤務されている村尾雪翔さんをゲストスピーカーにお迎えし、「性の多様性と保育」と題してご講演いただきました。

１.子どもの頃の記憶

性別への違和感をもったのは、５歳の時です。たまたま男児用のパンツを借りることになり、男の子のパンツをはいていることに何となく嬉しさを感じました。それを母親は、良く思っていないようでした。その後「私は女の子。男の子みたいなことをしてはいけない」と考え、女の子を演じました。他にも、ごっこ遊びで男役を好んで選択し、「女なのに変」と言われ傷ついたことを覚えています。

２.誰にも相談できなかった「性別に対する違和感」

小学校高学年頃には、体がより女性的になり、心と体が一致しないことで自分に嫌悪感をもつようになりました。学校での着替えで人に見られるのも嫌でしたが、周りの人に申し訳ないという気もちもありました。誰に相談すれば良いのかわからず、どうにもできない状態が高校生になっても続き、「自分は女性として生きていこう」と心に決めたこともありました。

３.常磐会短期大学での出会いによる変化

短大では、卜田先生のゼミに入りました。そこで、自分を理解してもらうために、先生や友だちに自分のことを伝えました。また、卒業論文は、性の多様性について書くことに決めたため、あらゆる人の性のあり方を知ることになり、「自分だけではない」「変だと思わなくてもいい」と考えるようになりました。そして、家族に自分のことをカミングアウトすることができました。

４.社会人での経験

社会人になり性別適合手術を受け、自分を取り戻すことができました。また、女性的だった名前を、男性的な名前に変えました。職場にも「男性として働きたい」と自分の想いを伝え、受け入れてもらいました。職員にカミングアウトしたとき、「それでいい」という反応が、ありがたかったです。周りの人が自分のことを理解し、寄り添ってくれたことが貴重であったと思います。

卜田先生とのトークセッション（抜粋）

卜田先生：自分の性のあり方については、幼児期に違和感をもちはじめる人もいることが分かっています。「自分は変なのではないか」と思う子どもがいる可能性もあります。このことを保育者として村尾先生は、どのように考えますか。

村尾先生：私が保育をしていくうえで大切にしていることは、「子どもたちを性別で分けない」「子どもたちの性を勝手に決めつけない」ということです。もしかしたら、自分が出会う子どもたちのなかに、自分と同じような葛藤を経験する子がいるかもしれないし、偏見をもつ子どもがいるかもしれないと思うからです。産まれたときに割り当てられた性別は、近くにいたおとなが決めたものです、その子が決めたものではありません。保育士として普段から「性は多様である」と考えてかかわるようにしていく必要があると思っています。

卜田先生：性別の基本は、「男」か「女」ではなく「多様でグラデーションのようなもの」です。それなのに、子ども時代に固定的な性の考え方を形成してしまうと、成長過程のどこかで苦しむ子がでてくるかもしれませんし、偏見がかった見方をもつ子が出てくるかもしれません。幼児期から「性が多様である」ことを当然のこととして理解できるようにかかわることが大切です。